

緩和ケアニュース

第41号

緩和ケア病棟ボランティア活動について



徳島 鳴門海峡 Photo T.I

公益財団法人 大原記念倉敷中央医療機構
倉敷中央病院 緩和ケアチーム
2018年4月発行



ようこそ緩和ケアニュースへ

今回のニュースは、倉敷中央病院緩和ケア病棟看護師長 原田から、緩和ケア病棟でのボランティア活動の必要性や意義について解説し、当院緩和ケア病棟での実際の取り組みについてご紹介させていただきます。

はじめに

日本ホスピス緩和ケア協会は、ホスピス緩和ケアの理念を、「ホスピス緩和ケアは、生命を脅かす疾患に直面する患者とその家族のQOL(人生と生活の質)の改善を目的とし、様々な専門職とボランティアがチーム全体として提供するケアである」と定義しています。また、ボランティアについて、①ボランティアはチームの一員であり、大切なケアの提供者である。②ボランティアは自由意思によって、チームに参加する。そして、チームにおける役割を明確にした上で応分の責任を果たす存在であると位置づけられています。

緩和ケア病棟にボランティアはなぜ必要か

緩和ケア病棟といえば、終末期医療、看取りの場とのイメージを持たれている患者・家族はまだ多いかと思えます。だからと言って、そのイメージが間違いだとも言い切れません。自分の病気は治癒することが難しく、かつ残された時間が限られていることを知った多くの人々は、限られた時間をできるかぎり苦痛なく、穏やかに過ごしたいと考えています。そして、緩和ケア病棟で過ごす時間は安らかで穏やかなものであって欲しいと願って病棟を訪れます。聖ヨハネホスピスケア研究所 所長山崎章朗氏は、「患者、家族は適切なケアが行われていれば、ホスピスで過ごすほとんどの時間は日常生活の繰り返しなのである。言い換えれば、患者は一日中患者でいるわけではないし、家族は一日中患者の家族ではないのである。その時、その時を大切に暮らす人々なのである。ボランティアが患者、家族が愛おしむように大切にする日常生活をサポートする重要な役割を担っている」と述べています。だからこそ、緩和ケア病棟の日常は、家庭にいるように穏やかで心地よく豊かなものであって欲しいと願うことは、患者・家族のみならず、緩和ケアに携わるものにとっても共通の願いなのです。

ボランティアの意義

病院、施設といった環境は、日常とはかけ離れた空間で、患者・家族は過度の緊張、不安を感じています。家族の言葉からも「病院に来るだけで疲れる」といった言葉をよく耳にします。そこに、医療者ではなく、一般(普通)の人としてボランティアの姿があることで、緊張感がほぐれ、安心感につながります。ボランティアは、普段は医療以外の社会や地域の中の生活者であり、社会の風を運んでくれる貴重な存在でもあります。療養中の患者は、患者であるだけでなく、一人の社会生活をしてきた人として存在することができます。日本病院ボランティア協会 前理事長 宮本美香子氏は「ホスピス緩和ケアのボランティ





アの基本は“いる”ことである。ボランティアがいることで安心を提供し、患者の日常生活を支え、社会の風を運び、開放的な空間を作り出すことにある」と述べています。まさに、ボランティアの存在が閉鎖的となりやすい病棟に潤いを与え、患者・家族の生活の質を向上する手助けとなっています。

当院緩和ケア病棟のボランティア

いままでの流れを踏まえながら、当院の緩和ケア病棟でのボランティアの活動についてご紹介したいと思います。ホスピス緩和ケアボランティアとして活動するにあたっては、事前に一定の講習を受けるのが通常とされています。これはボランティアが

“ホスピス緩和ケアを提供する一人”として位置づけられ、最低限の知識や心構えが必要だとされているからです。活動自体はそれぞれの病院の方針等によって異なりますが、患者、家族のQOLの維持・向上のために医療スタッフと連携・協力して活動しています。ホスピス緩和ケアボランティアは、緩和ケアチームの一員でありながら、情報共有の制限がある一方で、患者とその家族のプライバシーに留意しなければ



病棟のお花の手入れ



病棟の飾りつけ



ならない場面も多く、守秘義務に関しては医療スタッフと同等の責任が問われます。当院の緩和ケア病棟でも、開設2年目より緩和ケア病棟ボランティアの募集を開始しました。現在、研修を受講した6名のボランティアが緩和ケア病棟ボランティア「ふぁみーゆ」(※ファミリー f a m i l i e : フランス語で家族)として活動しています。

患者・家族にできるかぎり快適にすごしてもらえるようにするには、細々としたことが必要になってきます。車椅子や長椅子のクッション、日用品のカバーのような物品の制作、絵手紙、病棟内の環境整備など季節を感じてもらえるような飾りつけなどにボランティアの力が発揮されています。また、家族は介護疲れだけではなく、悲嘆の先取りであったり、それを秘めて生活することで、極限に近い疲労を抱えていることが多いです。そういった家族の話ボランティアが共感を持ちながら聴くことで、家族の押し詰まった気持ちが少しでもほぐればとの願いがこもっています。

実際の活動の内容としては、

- ①専門的技能を用いるもの：絵手紙（毎週月曜日）。
- ②癒しの環境（場）を創るもの：病棟飾りつけ（隔週水曜日）、病棟内のお花の手入れ。

絵手紙の作成





③病院の行事運営：季節行事の手伝い（クレモナホールコンサート、ウィンターコンサート）等があります。

～ボランティアの声～

私が緩和ケア病棟でボランティアを始めたきっかけは、夫が緩和ケア病棟で、良い時間を過ごさせていただいたからです。絵手紙の場に、季節の野菜や果物、花などを用意しています。病室から一歩外に出て、季節を感じていただくとともに、お喋りのきっかけにもなっています。描いた絵に言葉を添えて、患者さんやご家族の方が思いを伝えたり、時には自分へのメッセージを。心穏やかに過ごしていただけるよう、お手伝いができたら嬉しいです。

（絵手紙ボランティア 吉田信子さん より）

～ボランティアコーディネーターの声～

2015年1月より、ボランティアが導入されました。当初、ボランティアさんから、何をしたらいいんでしょう？という声がよく聞かれました。「非日常ではなく日常にいるお手伝いを考えましょう」と提案し、豊かな発想を発揮してボランティアならではの声が、現在の活動になっています。

押しつけにならないよう、謙虚な反省を重ねながら、医療者だけでは閉鎖的になってしまいがちな場所で、外の風を運び、家庭的な雰囲気を提供するお手伝いをいただいています。

（ボランティアコーディネーター 三宅優子さん より）

おわりに

表紙の写真は緩和ケアチームのメンバーが撮影した「徳島県の鳴門海峡の星空」です。星空の写真には花や木々のような鮮やかさはないですが、真っ暗な夜空に輝く星には凜とした美しさを感じます。緩和ケアニュースの写真の多くは、この腕の良いカメラマンが撮影しています。皆様、今後もお楽しみに。



発行元：公益財団法人 大原記念倉敷中央医療機構 倉敷中央病院 緩和ケアチーム

編集委員長：佐野 薫（医師）

編集委員：里見 史義（作業療法士） 武内 めぐみ（事務） 平田 佳子（看護師） 50音順